

大雪小雪：雑録

著者	瀧川生
雑誌名	龍南會雑誌
巻	8 4
ページ	6 3 - 6 7
発行年	1901-03-22
その他の言語のタイトル	大雪小雪：雑録
URL	http://hdl.handle.net/2298/5098

大雪小雪

瀧川生

寒稽苦のけたまましき竹刀の音枕に響きて、苦しき異郷の夢破れぬ。時は六時に近し。上熊本驛を上り一番列車の發するは六時五十七分なり、この列車にてぞ病めるわが友は歸國の途につくなる。曉寒むし、霜ふかし、空は雪の雲低うたれたり。

在別離の苦しさよ。われは別れてはまた逢ひがたき友を今一目見むとばかりにて、霜を蹈みて池田へと急ぐなりけり。大地凍つて鐵の如く、靴の音高く響きて市人が静けき曉の夢を亂すらん。

京町坂をかは登る頃雪ちらちら面をかすめて飛びぬ。夜目にもしるしや、袖上の白三點四點、風は外套の裾をまくりて、懷を襲ふ寒さ身を裂くばかりなり。京陵の一角よりふり返れば、しののめの空は雪の密雲に鎖されたれど、なほはの白き曙の色は匂へり。夜のあくるは程なかるべし、列車の來るも遠からざるべし。急がんなかな。いざ。

病めるわが友は、上等待合室の一隅に幾重にも毛布に包まれて、蹲り居れりき。薄ぐらきランプの光り斜にさきて、その顔一まは青白う見えたり。列車の來るには猶廿分あまりあるを、吾は急ぎし甲斐ありと思ひぬ。戸外には雪の飛ふこと益々烈しく、戸にあたりてばらららと音するは、霞の交れるにやあらん。入口より吹き込む風にも、吹雪まをれり。嘸どや寒かりけんを能くこそと、友の聲はあやしく皺がれたり。われは應へぬ。すえやかなる身には左程にもあらず、君こそ、長き旅

路にわやにくや今日の雪、かの無情の天をこそ恨め、いとひ給へや。
 友の傍に立てるは、六十路に近き君が父君なり。その健やかなる面は、憂の色と感謝の色と交々相まじはりて見えぬ。聞けば、此處まで、病める吾子を自ら脊負ひ來給ひしなりとよ。老いては吾子に負はれんと思へ、誰かはかくて吾子を負はんとは思ひかけけん。家郷千里、道寥々、負はるべきの人、負ふ可き人を負ひて、大雪小雪たえまなき道の長手に、おはれ老の足え堪んや。はかりがたきは不堅如聚沫の形骸に、旋轉極りなき運命のはかなさを托する吾れ人の身の上なるがな。昨日は霽津湖上に、オールを執りて、健腕を振ひし人、今日は垂死の病骸を、老父の脊に寄せて故山に還る。昨日才俊のはまれ今日かくてはた何にかせん。昨日の人既に今日の人にあらす。薄やみの夢路を辿る吾れ人の運命、誰かまた今日の我の明日の我たるを知らん。むしろ身を浮べる雲の行くべにまかせんが、たちがたきこの世の羈をいかにせん。思を流水の易きに寄せんか、悔て歸らざるの憂ひあり。抗しがたき運命の小車、かくてぞこの世の悲劇は始まるなる。

時は迫まりて猶僅に五分をあますのみ。友言はず、吾言はず、忽ち振鈴の音高く場内に響き渡れり。

れのれと今一人の友とは植木までの切符を買ひて共に乗車せり。つさせぬ名残にせめて今まばしと思へばなり。今日は他の乗客意の外に少かりければ、席を廣く占めて蒲團をしき、毛布をかけなごする程に、驛長が吹き鳴らす一聲の笛と共に、汽車は動きそめぬ。夜はまたく明けはなれたり。車窓

より見出せば西山の麓雪白うつもりて、頂は雲にかくれて見えず。氷鎖せる裾曲の田井につもれる雪の班なるもをかしと友の珍らしかるも、久しく病床にありて外界の風物に接すること稀なりしが故のみにあらずるべし。されどわれ等はこれを眺めたふるの暇あざりき。植木まで僅に八哩の道のり、羸車のすゝみの迅かなるぞ今はなかくに恨みなる。われ等は左右より友を打ち守りてあれど、言ひ出づべき言の葉とては無し。胸つと、ふたがりたれば、よしさる可き言の葉のありども、言ひ得べくもあらずしなり。

醫師は嘗て曰へり、友の病は不治の病なりと。されどわれ等は秘めて之をかれに告げざりき。こたびの歸國も病快よきからにはあらで、病院にあるも恢復の望みなければなり。されどわれ等は友を欺きぬ。憐れなる友はなほ未だこれ不治の病に罹れるを知らざるなり。かれ曰く春とならば癒えて再び相見るを得む、來む夏には君吾を訪ひ給へ、吾も君が家をこそと。その言葉は希望に満ちて、その青白き顔には、さみしき微笑を湛へたり。あゝ心直なる友はわれ等の欺き言を眞と信せるなり。されど君よ、あわれなる友よ、御身が病につきて醫師のわれ等に語れる所はさる望あるものにはあらずし。御身が携ふる一封の診斷書……故郷の醫師に宛てたるその一封の診斷書は如何なる宣告を齎らすかを御身は知らざるなり。あゝわれ等は欺けり、罪なき友を欺けり、否欺かざるを得ざりしなり。數日前のことなりき、吾等かれを病床に訪ひし時、かれ潜かに問うて曰く、吾が病は枯核にあらずるか、君等は秘め給ふにはあらずや、もし枯核とならばわれは自ら死せんのみと、われ等は言葉をつくしてその然らざるを辯じぬ。而してかれがかく問ひしはわれ等が醫師より忌は

しき報知を聞きし、日の午後のことなりき。あゝわれ等はかれを欺かざるを得ざりしなり。

あはれなる友は猶さま／＼のはかなき希望を語りつゝけぬ。われ等は答ふ可き言の葉を知らず、腸はに／＼胸は裂けんどす。友は猶語りつゝけぬ。傍へにこれを聞ける父君堪へずやありけん、こは／＼と咳嗽にむせ返りぬ。そは涙なるべし。泣くは泣かざるの悲みに如かず、言ふは言はざるの苦しみに如かずとかや、誰か一滴の暗涙を千行の涙に如かずといふ、われ等は殆ど之を聞くに堪へざりしなり。

去年の夏、破笠青鞋、相携へて薩南の山野にさすらひしもわれ等三人なりき。今年の春は袂をのらねて西肥の風光を訪ねんと約せしもわれ等三人なりき。ありし昔の樂みは終に再び得可からざるか、俱にと誓ひしかの望は終に空しかる可きか。風に吹かるゝ絮果の亂れ、散りて行くへは何處の里ぞ、何處の濱ぞ、今日一人に別れて残る二人、あゝまたいつまでか共にあるべき。

忽にして瀟笛は鳴りぬ。進行次第にゆるくなりて瀟車は柵内に入りぬ。われ等は既に植木に在り。あゝ終に別れざる可からざるか。終に別れざる可からざるか。われ等は立ちあがりぬ。見送る友のまなざしさがに涙に曇れり。さらば、さらば、下れば無情の列車は猶豫なく再び動き出しぬ。窓を透して見る悄然たる友の影、帽打ちふりて、さらば、さらば、あゝそれも見えすなりぬ。思を乗せて行く瀟車の遠く山蔭にかくれて、残る煙のゆら／＼と、かなたの雜木山を越えて終に消え失するまで、われ等は茫然として石像の加く佇み居たりき。

次の下り列車を待つとて、近きあたりの茶屋に入れば、大雪小雪、巴と亂れてまた降りいでたり。

不思議の家

狂 川

彼は一夕、ある高峯に登つた。見渡すと。晚煙うすく棚びいて居るダロー河は、透迄として美しい村里の間を流れ。ベガの清流、また夕日に輝いて、豊穰な平野を潤して居る。殊に眼下に群がる、幾多の小丘と、細溪は、繪のやうなグレナダの市府を包んでゐて、宛然ら此所に、地上の一小樂園は開かれて居るのである。

彼は此地で、再三件の老翁を見かけた。今やその好奇心は、ほどく極點に達して來た。殊に時刻といひ、場所柄といひ、大にかやうな念の發動を助けたから、彼は遂に意を決して、此奇怪な模索者を、其住家まで追従して見やうと思つた。この事たる、實に一種の冒險事業で、彼の好事の性癖には、至極適したものであるのだ。

彼は少し間隔を置いて、件の老翁に従つた。其初めは、見顯はされないやうにと、種々注意をして居たが、併しすぐ、彼翁は、何か自分の考事に耽つて居て、決して外物には、顧着して居ないといふことを感づいて來た。

兩人はしばらく、山の裾に添うて進み、然る後、ダロー河の繁みに入つた。やがて小丘の間の本